

別府八湯ウォーク紹介

研修部

別府八湯、明礬温泉、十一地蔵、

ウォークガイド、オンパク、ガイド資料

日 時 二〇〇九年（平成二十年）五月二十四日（日）

五月二十五日（月）

一〇時～一二時三〇分（予定）

駐車場所 さわやかハートピア、明礬

出発場所 同 上

解散場所 明礬湯の里

1 別府温泉保養ランド、紺屋温泉 紺屋地獄は、寛政七年

脇 蘭室が集録した『菌海漁談』に「隣近の地往々湯

池あり。海地獄、紺屋地獄、鬼山地獄、円内坊などと

称するもの甚衆し」と記述され江戸時代から知られて

いた。また『豊後風土記』に記された「玖倍理湯井」

であるという説もある。この紺屋地獄に布を浸して患

部にあてたところ治癒した。布は紺色に染まってい

た。それ以来、布を紺染めする時に利用されていたと

もいう。かつて九大温研（現九州大学病院先進医療セ

ンター）をはじめ、多くの病院や療養所で難病の治療

にも使われ、美容効果も高い。

酸性明礬温泉、硫黄泉。屋外泥湯、屋内泥湯、屋外

鉱泥（こうでい）大浴場、コロイド湯。開業は、昭和

四三年（一九六八年）、ホテル赤銅御殿を経営してい

た元別府商工会議所会頭、首藤克人氏による。

2 別府明礬温泉 ホテル さわやかハートピア明礬

源泉かけ流し、当ホテルは、循環していない源泉を

そのまま利用している。六〇歳以上のお客様には、宿

泊料金の割引がある。

カルシウム、ナトリウム、マグネシウム、硫酸

塩、炭酸水素塩泉。

健康型有料老人ホームも併設されている。

平成二〇年（二〇〇八年）七月一日から、厚生事業

団が運営する「厚生年金ハートピア別府」から「株式

会社さわやか倶楽部」が「ホテルさわやかハートピア

明礬」として引き継ぐことになった。二〇室、七五名

のホテルである。庭園東側に背の高いお地蔵さんが祀られている。

3 「明礬(みょうばん)」とは、硫酸アルミニウムとアルカリ金属・アンモニウム・タリウムなどの硫酸塩との総称をいう。古くから染め物を鮮やかに色づけたり皮をなめしたり、薬、火薬、絵画など、人々の暮らしに広く使われていた。

4 明礬製造の歴史 明礬温泉は、江戸時代の寛文年間(かんばん、一六六一年～一六七三年、江戸時代初期)に明礬製造が始まり、幾多の盛衰がありながら宝暦年間(一七五一年～一七六四年、江戸時代中期)から明和年間(一七六四年～一七七二年、徳川時代中期)にかけ豊後明礬は全国の七〇%に達していた。幕府の直轄事業として保護された面もあり莫大な利益をもたらした。明治時代の到来によって様々な制限が解除され、外国の化学製品も輸入されるようになり豊後明礬の価値も徐々に薄れていった。

明治一〇年代(一八七七年)に至つていよいよ豊後明礬の生産が窮地に追い込まれ廃業するに至つた。明治一七年(一八八四年)これまでの経験を元に明礬生

産の原材料のつくり方を工夫して湯の花としての入浴剤を販売することとなった。

明治二〇年代(一八八七年)から大正、昭和一〇年代(一九三五年)にかけて盛んに湯の花が生産され全国各地を始め海外にまで販路を広げていった。戦後(昭和二〇年、一九四五年)は全くの不振であったが、昭和三〇年代(一九五五年)になってやや回復し、五〇年代(一九七五年)には八〇棟の湯の花小屋が整備され生産量も回復したが、今日では再び三〇棟程度に縮小されている。「別府の古い歴史散歩」恒松 栖著から引用。

5 「湯の花」とは、別府市明礬温泉は、別府市街地を見下ろす鶴見山麓に位置する別府一の高台。ここで製造される薬用湯の花は、江戸時代の中期・享保一〇年(一七二五年)から約二八〇年という歴史を誇っている。

湯の花の一番の特徴は、無機塩類が皮膚のタンパク質と結合して膜を作り身体の熱の放散を防ぐ為、入浴後の保温効果が高く湯冷めしないこと、皮膚や汗腺などの脂肪や汚れを乳化する洗浄効果があること。入浴

後は身体がぼかばかとあたたかくなり、「一日の疲れが消えたようにさっぱりする」のは、この特徴のおかげである。

6

湯の花小屋 明礬温泉地区は相当な地熱地帯で、地下三〇mあたりにはもう温泉脈があり、地表から勢いよく温泉ガスの蒸気が噴出している。ここに約三〇、五〇棟建つ藁ふき屋根の小屋、これが湯の花を江戸時代から造り続ける湯の花小屋なのである。この製法も世界ではここだけである。まず、湯の花を作る小屋造りは噴気の多い場所が選ばれる。温泉ガスが均等に小屋内で噴出出来るよう栗石で石積みを作り、この地特有の青粘土（学名モンモリロナイト）を敷き詰め、その上に三角屋根のわら葺き小屋を建設する。地下のガスの蒸気が栗石の隙間から青粘土の中に入り、ガス中の成分と青粘土の成分が結晶。この結晶が湯の花で、一日約一ミリずつ成長し、四〇から六〇日かけて採取、精製、乾燥して製品化される。湯の花小屋は、雨降りでも小屋の内部の温度を一定に保ち、雨漏りはせず、蒸気中の水分をわら屋根が水滴とならず屋外へと放出させる。しかし、小屋の寿命は長くて三年、そのたび

に葺き替える。

「湯の里」の資料より引用。

恒松栖氏の「湯の花の研究」によれば、大正一五年（一九二六年）当時の湯の花小屋は明礬地区に一五三棟、湯山地区に一一九棟の合計二七二棟もあったという。

7

明礬地区内の境界線 明礬地区は真ん中を流れる小川（平田川上流）によって区切られ、南側は玖珠の森藩久留島侯の領地の鶴見村に属し、北側は天領（徳川幕府直轄地）で野田村に属していた。

8

旅館 岡本屋

明礬温泉、青磁色の湯。湯は自然湧出。源泉掛け流し、純度一〇〇%天然温泉。単純酸性硫酸泉（硫化水素型）。創業は明治一〇年（一八七七年）。

又は明治八年（一八七五年）創業の説もある。本業は湯の花の製造。

旬の食材を温泉の蒸気で一気に蒸し上げる「地獄蒸し」は好評、なお「地獄蒸しプリン」も自慢の一品である。本業は湯の花の製造。江戸時代の文化元年（一八〇四年）、初代岩瀬正綱（権平）が玖珠森藩の飛

び地だった鶴見村の明礬に山奉行として派遣され、硫黄採掘や明礬製造にあたった。三代目の保彦の時には湯の花製造者の組合も作って組合長をつとめた。今も「湯之花組合創立記念碑 岩瀬保彦君」(明治四三年建立)という巨大な石碑が、旅館の庭にそびえている。嘉永四年(一八五一年)生まれ、大正一三年(一九二四年)一〇月一四日に七四歳で没。岩瀬清吾が大正二年(一九一三年)に大旅館を建築する。

岡本屋の屋号は出身地、竹田の地名からつけられたという。初代岩瀬正綱は竹田の出身だが、久留島侯に重く用いられたのは特殊技術(鉄砲の弾丸)を持っていたからといわれている。

9 糸びすや旅館、湯屋えびす 二つの泉質。まずは、独特な匂いと白濁色の湯が特徴の「硫黄泉」。硫化炭素ガスが含まれているため、毛細血管を広げ、血圧を下げる作用がある。浴用、飲用ともに療養効果は高い為、疲労回復はもちろん、皮膚病・切り傷などの治癒にも最適である。

そしてもうひとつは無色透明なアルカリ性の「炭酸泉」。皮膚の角質をやわらかくして脂肪分や分泌物を

洗い流してくれるので、しっとりとした潤い肌になれる。泉質、硫黄泉、単純泉。明治七年(一八七四年)創業の旅館。鶴寿泉のそばに立つ「瀧蒸浴場私設記念碑」(明治三五年)にも「工事監督人」として大きく刻まれている。

平成一七年(二〇〇五年)一月にリニューアルした外湯が人気を呼んでいる。

「湯屋えびす、家族湯」、硫黄泉。

「湯屋えびす」、硫黄泉・単純泉。

10 糸びす屋温泉下 バス道路沿いの三叉路北側にある。家族湯。硫黄泉。

11 糸びす屋温泉上 糸びすや旅館とバス道路との間にある。硫黄泉・単純泉。

12 弘法大師観音堂 「湯屋えびす」と「えびすや旅館」とバス道路(国道五〇〇号線)との間に「弘法大師観音堂」がある。お地藏さんが祀られている。

13 昭和三三年(一九五八年)明礬の大火 昭和三三年の大火で鶴寿泉が焼失。

昭和三七年(一九六二年)に再建された。その後、平成八年(一九九六年)三月に現在の姿になった。

14 やまなみ荘旅館 三叉路東側にある。道路を北側に進むと「豊前屋」、「地藏泉」、「貸間すい荘」、「小倉屋」、「枡屋旅館」、「大和屋旅館」がある。

15 民宿明礬 明礬薬師寺入り口、三叉路の東側にある。

16 薬師茶屋 明礬薬師寺境内、南側にある。現在、営業はしていない。

17 明礬薬師寺 明礬地区の西側山手にある。「民宿明礬」の西側山手に位置する。西側山手には「お滝」がある。境内北側に「とびの湯」があった。明礬には珍しい炭酸泉。透明。胃腸病を治すため飲用もされていた。現在、温泉は閉鎖されている。毎月、第三日曜日は信者たちの手になる清掃の日となっている。お地藏さんが祀られている。

18 とびの湯 薬師寺の中に、現在は一般開放していないが明礬地区では珍しい炭酸泉の「とびの湯」の浴場がある。とびの湯一体は、現在は本堂や水子堂などがある立派な明礬薬師寺となっている。上尾恵真管主は昭和五〇年（一九七五年）一月八日から三〇年余りかけて整備してきたという。とびの湯の由来は、かつて脚を痛めたトビが傷を癒したことから。その場所を里人

が掘ったところ霊泉が沸きだし、「とびの湯」と名付けたと言いつたえられている。明礬には珍しい炭酸泉で、底に針が落ちても見えるほど透明。胃腸病を治すために飲用もされた。現在、「とびの湯」は閉鎖されている。

19 とび公園 「とびの湯」の周囲には池の跡があったり、灯籠が置かれていたりして、かつての庭園の名残を感じさせる。明治四二年（一九〇九年）二月に築かれたものらしく、ほぼ一〇〇年近く前の明治末の本に、鳶（とび）温泉と養寿園を泉屋旅館の遠藤駒太郎という人物が開設したと書かれている。大正時代も明礬名所のひとつだったようで、「付近の遊覧所としては登美園（加藤永次氏経営）明礬山公園、紺屋地獄等がある」（大正四年（一九一五年）「別府温泉」）とある。尚経営者加藤永次氏とはのちに朝日村の村長もした人物。戦前から戦後間もない頃までは岡本屋の所有地だった。野上三郎さんはここで、旅館「鳶の湯」を営んでいた。娘野上輝子さんによると、昔のとびの湯はわらぶき屋根で現在の温泉よりも奥にあった。池にはコイなども泳いでいた。客室は手前に並んでいたという。

20 明礬八十八カ所 二〇〇体以上の仏がずらりと安置さ

れ、修行の滝場や大師堂もある霊験あらたかな「明礬八十八カ所」。場所は明礬薬師寺そばで、稼（かせ）川沿いに一〇〇メートルあまり上って行った所にある。初めて訪れた人は、その仏の数の多さに圧倒される。

そのいきさつは「みどり荘」の加藤義則さんがくわしい。

大正初年（一九一二年）、安野智円師が始まりで、娘の内田ロクを中心に、昭和三五年（一九六〇年）に多くの仏を一堂に集めたという。お滝にはお地藏さんが祀られている。

21 豊前屋旅館 昭和三〇年（一九五五年）代から続く家族

経営のアットホームな旅館。単純酸性硫黄泉（硫化水素型）。大人三〇〇円。源泉名、トビ温泉。「地藏泉」の裏手にある。明治四〇年（一九〇七年）以前から営業していた。地藏泉の南側にある豊前屋旅館。お地藏さんが祀られている。

22 地藏泉 閉鎖中。平成一六年（二〇〇四年）一月から

湯量減少のため閉鎖されている。「地藏泉」を「上の湯」

と呼んでいた。鶴寿泉を「下の湯」という。地藏泉は

豊前屋の北隣にある。東側には「貸間すい荘」。北側には「大和屋旅館」がる。鎌倉・弘安四年（一二八一年）に開設された。お地藏さんが祀られている。

23 貸間「すい荘」 昭和一〇年（一九三五年）代に始めた。元は「翠荘」と漢字で書いていた。昭和四〇年（一九六五年）から貸間を続けている。

坂道を上がったところにある貸間「すい荘」。すい荘の南隣は豊前屋、すい荘の道路前、西側には榎屋旅館、南隣には小倉屋があった。西側には「地藏泉」がある。

24 小倉屋 地藏泉界隈には榎屋旅館の南隣に、やはり三階

建ての小倉屋旅館があった。昭和六〇年頃（一九八五年）には、もう営業していなかった。建物は平成一七年（二〇〇五年）一月に取り壊した。榎屋旅館の左となり、小倉屋があった場所は現在空き地となっている。

25 榎屋旅館 明治八年（一八七五年）に創業。明治四二年

（一九〇九年）に三階建てとなる。平成一〇年（一九九八年）に旅館を廃業した。「貸間すい荘」の向かい側、北西方向に「榎屋旅館」があった。

大和屋旅館 地蔵泉バス停から西側左の道を上ると右側に大和屋旅館に至る。道路左側には「地蔵泉」と「貸間すい荘」がある。大和屋旅館は酸性硫化水素泉。現在休業中。地蔵泉の北隣に大和屋旅館がある。四国愛媛八幡浜から別府明礬に來た。明治時代から貸間をしていたらしい。昭和六〇年（一九八五年）に改築。石垣が目立つ。

昭和七年頃（一九三二年）は年間約二、〇〇〇人の宿泊客があつたようで、大勢の客を受け入れていた。明礬町公民館 「大和屋旅館」の北西側の三叉路から西側にある。

公民館には、貸間「すい荘」の野上三郎が描いた大きな水墨画「明礬温泉全景」が展示されている。三郎は、明治三六年（一九〇三年）明礬の生まれで、昭和五九年（一九八四年）に亡くなっている。昭和五八年に八〇歳の記念で製作し、公民館に寄贈したもの。明礬地区の全体を見事に描いた作品であると同時に、明治末から大正期の明礬を知る貴重な歴史資料となっている。描かれている旅館は一七軒。

旅館若杉 硫黄泉・アルカリ単純泉。道路東側、「岡本

屋売店」の南側には「湯の花小屋」がある。全室、和室、六部屋、二階、二重ガラス窓。

29 風の湯 地蔵泉バス停から西側右手の道を上ると山の湯旅館に至る。

単純泉。単純酸性泉。旅館岡本屋が経営する平成六年（一九九四年）一二月末にオープンした。白っぽい薄青色。五〇〇円。四差路の駐車場北側には「山の湯家族風呂」がある。単純泉。明礬地獄（湯の花小屋）の西側にある。お地蔵さんが祀られている。

30 明礬地獄 バス停「地蔵湯」の西側にあり、ここには「湯の花小屋」がある。

31 旅館みどり荘 単純硫黄泉。単純硫化水素泉。内湯は三カ所。浴槽は縁から底まで全て「ひのき」で心地よい肌さわりである。他に露天風呂がある。内湯、五〇〇円、露天風呂、七〇〇円。「みどり荘旅館」と「湯の里」との間には「湯の花小屋」がある。旅館庭先の「大寒（おおかん）桜」がみごとである。日出町豊岡の「魚見桜」

よりも早く開花するといわれている。

- 昭和五〇年（一九七五年）四月二二日、午前二時三七分、大分県中部地区地震が発生した。マグニチュード六・四、直下型地震であった。このとき、別府市明礬の旅館みどり荘の主人、加藤義則氏の土地に温泉が吹き上げた。場所は「ホテル・ハートピア明礬」と明礬バス停との中間、国道五〇〇号線の北側であった。数年後、温泉の吹き上げはいつの間にか止まってしまった。旅館みどり荘にはお地蔵さんが祀られている。
- 32 温泉神井泉 「地蔵泉」、「鶴寿泉」、「とびの湯」、「神井泉」の明礬四大温泉のうちのひとつ。場所は「旅館みどり荘」と「脇屋」との間、西側にある。「組合員のみ入浴可」となっている。温泉神井泉にお地蔵さんが祀られている。

- 33 明礬湯の里 大露天岩風呂、男女別。男女別の内湯あり。乳白色の湯。

泉質、単純酸性硫黄泉。家族湯は湯の花小屋と同じ。内部は岩風呂やひのき風呂。

湯の花が「国の重要無形民族文化財」の指定を受ける。平成一八年（二〇〇六年）三月。

- 34 (有)脇屋商会 「別府明礬温泉、湯の里」を経営している。

別府で明礬を初めて作った人は肥後の国、八代（やつしろ）の人、渡辺五郎右衛門であった。彼は長崎の中国人から明礬の製法を習得し、寛文六年（一六六六年、江戸時代初期）に豊後鶴見村と野田村の硫黄産出地で、明礬の製造に成功した。渡辺五郎右衛門の墓（別府市有形文化財）は市内荘園町の別府発達医療センター（旧別府整肢園）の裏に現存している。

現在湯の花をつくっている「湯の里」の社長の先祖は新田義貞の弟、脇屋儀助。その子孫であり、脇室の祖父でもある脇儀助（よしすけ）が明礬作りを引き継ぎ、明礬の製造を成功させた。新田義貞（一三〇一年～一三三八年）は鎌倉末期、南北朝時代の武将。

- 35 ともゑや 「湯の里」の一角に設けた、ぬくもりあふれる和風雑貨の店。

- 36 明礬喫茶 「脇屋商会」、「湯の里」敷地内にある。

- 37 湯の花製造所 「湯の花小屋」のことをいう。明礬には現在約三〇～五〇棟建っている。

- 38 珈琲岡本屋、湯の花直売所 バス停「地蔵湯前」の東側

にある。北側駐車場の東側には「湯の花小屋」がある。
山田屋旅館 別府で唯一の緑磐泉（りよくばんせん）
含鉄泉。

一五〇年（一八五九年、安政六年、江戸時代末期）
の歴史を持つ老舗旅館。

明礬温泉道路の「ゑびすや旅館」に並んで「湯元屋
旅館」、「山田屋旅館」がある。山田屋駐車場と小川を
隔てて「山田屋旅館、霊鉱泉」がある。お地蔵さんが
祀られている。

40 湯元屋旅館 酸性アルミニウム、硫酸塩泉。湯本屋と
もいう。明治一〇年（一八七七年）代に創業。現在は
二階建てだが、昭和三三年（一九五八年）明礬大火の
前は三階建て旅館だった。大火では、岡本屋は被害を
免れたものの、ゑびすや、湯元屋、今はない旭屋（湯
元屋の東隣）と三つの三階建て旅館が全焼した。その
後、湯元屋は昭和三五年（一九六〇年）はじめに再建
された。昭和七年度（一九三二年）には年間一、二九二
人が宿泊しており、繁盛していたようだ。

41 薬師湯 鶴寿泉から少し上がって山田屋の路を挟んで向
かい側、岡本屋の倉庫がある場所がかつての薬師温泉。

主に大正時代の様子を描いた「明礬全景」の水墨画（野
上三郎作）には、薬師堂と薬師湯、蒸し湯、滝湯が描
かれている。昭和七年（一九三二年）生まれの豊前屋
旅館、毛利福義さんが記憶している薬師湯は、浴場の
ほか、四つほどの蒸し湯もあり、滝湯は一〇段ほど階
段を下がり、湯を浴びるようになっていた。

蒸し湯の横に薬師堂が祀られていたという。温泉の
前には道があり、蒸し湯と滝湯の横には川が流れてい
た。薬師湯は昭和三六年（一九六一年）頃までであつた
のではないかという。

大正一四年（一九二五年）「最新案内別府温泉」の
明礬の名称旧跡の項には「薬師如来」がとりあげられ
ており、薬師温泉の名前が登場している。

岡本屋の岩瀬公男さんによると、現在鶴寿泉そばに
立つ石碑「瀧蒸浴場私設記念碑」（明治三五年（一九〇二
年）三月）の瀧湯がこれという。

この石碑は一般には鶴寿泉建設に関わるものではな
いといわれている。

現在、岡本屋倉庫裏には瀧湯の痕跡を見ることが出
来る。

鶴寿泉（かくじゅせん） 男湯、女湯とも、無料市営温泉。

酸性泉。古くから「下の湯」、「鶴亀泉」とも呼ばれた。

昭和三十三年（一九五八年）の明礬大火で焼失した。昭和三十七年に再建されたが、ブロック造りの粗末な造りだった。現在の温泉は、平成八年（一九九六年）三月に建設された。単純酸性温泉。

「旅館岡本屋」、「ゑびすや旅館」、「湯元屋旅館」の三叉路北側にある。

現在の湯元屋のすぐ下にあった鶴寿泉が、今の位置に移ったのは昭和一三年（一九三八年）頃のこと。立派な滝湯もあった。もともと松屋という三階建ての立派な旅館があった場所で、昭和九年（一九九七年）朝日村の土地になっている。朝日村が別府市と合併した（昭和一〇年九月四日）あと、老朽化した鶴寿泉を移転新築することになったと思われる。

四大温泉の一つ、鶴寿泉、大火前は立派な御殿造りであったという。

「地蔵泉」を「上の湯」、「鶴寿泉」を「下の湯」ともいう。

明治三五年（一九〇二年）「新撰豊後温泉誌」には、

「鶴寿泉」名、「下の湯」は寛文（かんぶん、一六六一

年～一六七三年、江戸時代初期）中、領主久留島侯が明礬製造所（明礬製造小屋）臨覽ありしとき新たに浴室を設けられたるなり」とある。お地蔵さんが祀られている。

43 「湯の花組合記念碑」 明治四三年（一九一〇年）建立。「旅館岡本屋」の庭に建てられている。

44 別府明礬橋 コンクリートアーチ橋。昭和六四年（平成

元年、一九八九年）の竣工。大分自動車道。上路式鉄筋コンクリート固定アーチ橋。

昭和六四年（平成元年、一九八九年）の土木学会田中賞を受賞。

橋長 四一・〇m。アーチ支間、一三三・五〇m。

45 明礬地区お地蔵さん、十一体

1 ホテル・ハートピア明礬

2 弘法大師観音堂

3 お滝

4 薬師寺

5 豊前屋旅館

6 地蔵泉

- 7 山の湯
- 8 みどり荘旅館
- 9 湯の里（温泉神井泉内）
- 10 山木屋旅館
- 11 鶴寿泉

取材や校正をお願いした方々、別府市湯山在住の別府史談会副会長 恒松 栖氏、明礬地区の加藤義則氏、ホテルさわやかハートピア明礬の支配人 川田 務氏、大畑地区の川田 康氏、今日新聞社の小野 弘氏に紙上をお借りして御礼申し上げます。

参考、引用資料

- 各種、別府明礬観光資料
- 今日新聞「懐かしの別府ものがたり」
- 『別府の古い道 歴史散歩』別府史談会
- 『湯の花の研究』恒松 栖著
- 『大分・別府、湯布院を歩く』海鳥社
- インターネット。

